大阪商業大学学術情報リポジトリ

北米北西部毛皮フロンティア史研究の射程 ―デイヴィッド・トンプソンの業績と評価に触れて―

メタデータ	言語: ja
	出版者: 大阪商業大学商経学会
	公開日: 2021-09-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 下山, 晃, SHIMOYAMA, Akira
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1025

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

北米北西部毛皮フロンティア史研究の射程
―デイヴィッド・トンプソンの業績と評価に触れて―

下　山　　晃

はじめに
1．北米北西部毛皮交易の歴史的位置づけ
2．デイヴィッド・トンプソン研究の史料・文献・参考サイト解題
おわりに

はじめに

北米大陸の歩みは「開拓の歴史」として語られ続けてきた。これはもちろん、欧米の歴史家の視点からの言説によるもので、特に、元は毛皮交易史の研究に関心を寄せたF･J･ターナーが「民主主義のゆりかご」としてのフロンティア理論を提唱し、それがアメリカ史、特にアメリカ西部史の代表的な学説となったことが一つの素因である。こうしたトレンドは、冷戦期のイデオロギー論争などとも絡まって「アメリカン・ドリームの強調」や「アメリカ例外論」と結びついたり、世界史的にも異様に際立った人種差別問題を「棚上げ」するような論調に結びついた。歴史教科書の記述はもちろんのこと、大衆向けの演劇やHorse opera、保守的・原理主義的教会での説教、テレビのファミリー向けドラマ、そして西部劇を典型とするハリウッド映画の影響なども大きい。カントリー・ソングが「母なる大自然の西部」「アメリカ人の心の故郷としてのフロンティア」といったイメージを増幅したことの影響も少なくはない[1)]。

しかし、〈manly & masterful〉を観念の主軸として冒険心や大自然への憧れを刺激するそうした「勇壮・気宇壮大で小気味の良い言説・学説」の大方は、西部・北西部「開拓」の流

1）拙稿「Hilbilly 像の形成と変遷：ウィルダネスからカントリーへ」『大阪商業大学　アミューズメント産業研究所紀要』第9号、pp.41-54　なお、以下に「manly & masterful」とあるのは、ターナーと互いに絶賛し合い西部史観を共有したセオドア・ルーズヴェルトの好んだ言い回しである。ルーズヴェルトは、先住民への非道を告発したヘレン・ハント・ジャクソンの『恥ずべき1世紀』を「軟弱」と一蹴して冷笑し、The Winning of the West を書き上げてフロンティア開拓は優等なアングロサクソンの白人が野蛮人に文明化をもたらす manly duty だと定式化した。その歴史認識はカリブ海域への帝国主義政策としても拡張された。本間長世編『アメリカ・インディアン』（研究社アメリカ古典文庫14、1977年）、R・ホーフスタッター『アメリカの政治的伝統』（田口冨久治ほか訳、岩波書店、1960年）第2巻第4章。Lumen Learning, Theodore Roosevelt and American Imperialism: https://courses.lumenlearning.com/ushistory2ay/chapter/theodore-roosevelt-and-american-imperialism-2/

れをもたらしたグローバルな社会経済史的背景と先住民の固有の歴史文化への理解を欠くもので、北米西部・北西部の歴史の実相を必ずしも伝えるものではなかった。闇雲な土地先取競争（Land Rush）やゴールドラッシュ、毛皮獣乱獲、バッファロー絶滅策、そして大規模奴隷制の拡大や容赦ない先住民掃滅などを伴った実際のアメリカ史の展開に照らしてみれば、〈manly & masterful〉は、「男らしく、首尾よく」などと訳すよりも、「薙ぎ倒す勢いの」といったニュアンスで捉えるのがむしろ適切である。この「勢い」は、やがてはハワイなどを併合、太平洋戦争の時代には、アメリカ空軍の「日本人根絶やし作戦」という全土爆撃戦略の「正当性の神話」に結びついていくと見通すのも、実はそれほど的外れなことではない。

早くも16世紀の初頭以来、北米北西領域一帯の多くは、何よりまず、毛皮資源の縄張りを先取する「Indian trade = Fur trade」の「未開地」および自派勢力拡大のための布教地としてヨーロッパ人には認識され、まずは多くの毛皮猟師や毛皮会社、探検家、司祭・宣教師が先を争って奥地の森を目指した。開拓の主役だったのは、ハドソン湾会社（HBC）というイギリスの巨大国策会社とそのライバルの北西会社（NWC）、そしてジョン・ジェイコブ・アスターの関わったいくつかの毛皮会社をはじめとしたアメリカの毛皮会社・毛皮猟師・毛皮商人である。シベリアからは各地の先住民に厳しい毛皮貢納（ヤサク）を課しながらクロテン・ラッコなどの高級毛皮の獲得に狂奔したロシア・アメリカ会社や多くの「もぐり商人」も侵出し、カリフォルニアからはスペイン人が先住民奴隷化を続けながら北上していた[2)]。

こうした、北米西部・北西部「開拓」の歴史について筆者は、『毛皮と皮革の文明史』(2005年）でその概要を紹介し、それに続いていくつかの論稿で分析と考察を重ねてきたが、この度、北米北西部の毛皮フロンティアでHBCとNWCの両社に雇われ、北西部開拓地の地図づくりに傑出した業績を残したデイヴィッド・トンプソン（1770年～1857年）の評伝を書き上げて出版することとなった。『奇跡の地図を作った男：カナダの測量探検家デイヴィッド・トンプソン』(大修館書店）がその新著であるが、紙幅の都合のためにその本で紹介・リストアップしきれなかった内容や参考文献も多く、この研究ノートで補足を行なっておくとともに、社会科学的な研究の乏しい北米北西部史の実像分析のためのいくつかの要点を整理しておきたい。

1．北米北西部毛皮交易の歴史的位置づけ

北米北西部は、アメリカの「フロンティア発展史」の通常の理解では、「最後の開拓地」として捉えられるのが一般的である。しかし、すでにアメリカ植民期・建国期のずっと前から、太平洋に至ってアジアに抜ける北西航路の探索は、ヨーロッパ各国の支配層や商人たち

2）拙稿「植民期アメリカの毛皮交易：インディアン奴隷制の展開にふれて」『龍谷大学社会科学研究年報』第20号、pp.58-80。下山『毛皮と皮革の文明史：世界フロンティアと略奪のシステム』ミネルヴァ書房、2005年

にとっては最大の関心事であり、北米北西部での覇権獲得や商業圏の支配は、アジア市場を抱合したグローバルな経済権益の獲得の問題と関連して最重要の政治課題であった。

従って、たとえば建国直後のアメリカの大統領、ワシントンやジェファーソンは、英領ルパートランド（HBC の社領）や北西部テリトリーを含めた先住民の居住区との国境画定問題には、常に最大の関心を寄せていた。ワシントンは、境界地方の先住民は殲滅するという軍事的行動を基本とし、ジェファーソンはそれに加えてルイジアナ購入やルイス＝クラーク探検隊を派遣するといった領地確定策に細心の気配りをしていた。「イギリスから独立」などと言ってはみても、その独立したばかりのアメリカ合衆国は一体どこからどこまでが国家領土なのか、誰にも答えられない情勢が長く続いたのである。

新著で紹介したトンプソンは、アメリカとカナダの国境画定に際して最も主要な役割を果たした測量士・地図職人で、英米両政府の依頼を受けて極寒のフロンティアで延べ9000キロに及ぶ米加国境（二国間国境では、今でも地上最長である）を測量し確定した人物である。

ロンドンの貧民街に生まれ、慈善学校で特別優等な成績を修めて HBC にまずは奉公人として雇われ、誰もが驚愕するような仕事ぶりで多数の観測記録と地方地図（現在はカナダ国宝）を残した。当時としては全く異例なことに先住民には心からの敬慕の念と愛情を抱き、混血の少女を妻として幼子たちと共に零下30度、40度というロッキー一帯を周回、正確無比な地図類と博物学的な記録類を作り続けた人物である。しかし、その業績はすべて剽窃され、晩年には事業の失敗も累積して、極貧のうちに世を去った。その偉業が再評価されはじめたのは死後半世紀を経てからであるが、先住民に対する差別意識の濃厚なカナダでは毀誉褒貶が激しく、トンプソンが全面的に「復権」を果たすのは逝去して150年後のことである。

そのトンプソンが周回し測量した北米北西部は、ビーヴァーやヤマネコの乱獲を伴いながら「開拓」が進展した「毛皮の宝庫」であるが、その宝庫の毛皮圏と、ラッコやアザラシなどの海獣毛皮猟のためにヨーロッパ商人が殺到した北太平洋の毛皮圏とは、実はアメリカ東部の工業化や南部奴隷制農園の発展とも連動して拡張した、「大陸経済圏」の要でもあった。そして、それはハワイや南太平洋諸島との貿易、さらには広東貿易やベンガル湾との貿易とも連結した「グローバル経済圏」の要でもあった。どの経済圏も、北米北西部の毛皮のフロンティアと有機的にむすびついて、歴史を刻んでいたのである。大まかな見取り図で、少し理解しにくい点も残ると思われるが、その点については、詳しくはミネルヴァ世界史叢書『ものがつなぐ世界史』所収の拙稿「毛皮」を参照していただきたいと思う[3)]。

2．デイヴィッド・トンプソン研究の史料・文献・参考サイト解題

さて、そのデイヴィッド・トンプソンに関する研究資料の問題である。日本語のウィキペディアには、2021年７月時点で解説項目は無い。以下は新著巻末の「文献改題」と重複する部分も少なくないが、関連資料をまとめて一覧するためにも、本稿にあえてまとめて掲載し

3）拙稿「毛皮：北米交易圏をめぐる二つの歴史層」桃木至朗編『ものがつなぐ世界史』MINERVA 世界史叢書第５巻、ミネルヴァ書房、2021年、第９章

ておくのがよいと考え、重複も已む無しと判断した。北米北西部研究が未だ手薄であることや同地域の経済史的重要性に鑑みれば、今後の研究のためにもその方が妥当であろう。そしてトンプソンという人物の際立った異色性に鑑みて、その判断での執筆とした。いちいち地図作成のための測量・計測をしながら延べ10万キロ以上という信じがたいような総周回距離（比叡山の「千日回峰行」の達成者の事例から考えると、トンプソンは1000年に1度出るか出ないかの人物、ということになる）や気候・社会条件、先住民と白人の敵対関係拡大期における彼の類例の無いスタンスなども考え合わせると、紙幅の都合で中途半端な形でしか資料紹介のできなかったことは、トンプソンにこだわってきた筆者としては、一種「手落ち」という感覚も残っているのである。

ウィキペディア日本語版には関連項目は無いが、プリート・J・ベシリンド他「カナダを“測った”冒険家」（『ナショナル・ジオグラフィック』1996年5月号第2巻第5号）の記事と、スタンプメイツのサイト（http://www.venus.zaq.jp/voyage/ship/gv-cThmpsn.html）には簡単なトンプソン紹介がある。しかし地図の歴史関係の書籍・論文・サイト、そして山岳史・探検史関連の文献にも言及はほとんどない。カナダ関係の邦語学術研究論文や測量、天文学関連の文献、サイトも同様である。

一時史料としてまず参照されるべきなのは、トンプソン死去の半世紀後にトンプソンの偉業の真価を「発掘」したジョゼフ・B・ティレルが編纂した『体験談 Narrative』（『自伝』『回想録』）である。これは、ティレルが30年以上の執念を注ぎ込んで出版されることになったものであるが、今では以下のサイトなどで全文を参照することが出来る。

Full text of “David Thompson’s narrative” https://archive.org/stream/davidthompsonsna00thom/davidthompsonsna00thom_djvu.txt

改訂版の代表的なものとして、Glover, Richard (ed.), *David Thompson’s Narrative*, 1784-1812. (Champlain Society : Toronto, 1962). がある。ただし、サミュエル・ハーンの研究家であったグローヴァーは、先住民と友好的に接したトンプソンと、ハーンよりもトンプソンをずっと高く評価したティレルのことがよほど気に入らなかったようで、「ティレル編の『体験談』は聖人伝説 hagiography のようなものだ」と強く批判し、トンプソンの全人格を揶揄するような一文まで書いている。このグローヴァーの「アンチ・トンプソン」の見解の影響は、その後30年間カナダの歴史家の間で広く受容されてしまうことになる。

『体験談』に先立ってティレルがはじめてトンプソンを紹介した *A Brief Narrative of the Journeys of David Thompson in North-Western America*（体験談概要）は、Nabu Press から2011年にペーパーバックが出ている。「概要」と同種のものとしては、

「Forgotten Books」の *David Thompson’s Narrative of His Explorations in Western America: 1784-1812*（Classic Reprint）や、2015年版 Scholar’s Choice Edition、そして William E. Moreau, *The Writings of David Thompson.* などがある。

近年の主なトンプソン評伝でまず参照すべきは

Andra-Warner, Elle. *David Thompson: A Life of Adventure and Discovery*（Amazing Stories, Heritage House Publishing, 2010). Kindle 版。

Jenish, D’Arcy. *Epic Wanderer: David Thompson and the Mapping of the Canadian West*

（Bison Books, 2009）. Kindle 版。

Nisbet, Jack. *Sources of the River: Tracking David Thompson Across North America* （Sasquatch Books; 2nd ed., 2007）.

Nisbet, Jack. *The Mapmaker's Eye: David Thompson on the Columbia Plateau* （Washington State University Press, 2005）.

Pole, Graeme. *David Thompson: The Epic Expeditions of a Great Canadian Explorer* （Altitude Publishing Canada, 2003）

及び、最も標準的な

Smith, K. James. *David Thompson* （The Canadians: A Continuing Series, Fitzhenry & Whiteside, 2003）.

の 6 冊、Nisbet については次のサイトも参照容易である。

'A place to build a House on' David Thompson, Kullyspel House and the Indian Meadows tribal encampment on Lake Pend Oreille http://www.sandpointonline.com/sandpointmag/sms09/david_thompson.html

Archives of Ontario には、David Thompson, Map Maker, Explorer and visiary. http://www.archives.gov.on.ca/en/explore/online/thompson/index.aspx など関連情報がある。

トンプソンは不慮の事故で18歳の時に片足不具となり、20歳の時には右目を失明している。その失明の事情については、'A Theory on the Cause of David Thompson's Blindness', *Northwest Journal* Vol. II, pp. 23-26.

HBC や NWC が「毛皮の宝庫」としてナワバリの先取争いに鎬を削ったアサバスカ地方におけるトンプソンの探査の概要は、The Fur Trade and the Athabasca Valley, The Abridged Version：http://www.hihostels.ca/westerncanada/docs/EIR/440%20EIR%20Manual%20-%20ATHABASCA%20The%20Fur%20Trade.pdf から知ることが出来る。

トンプソンの測量技術が如何に豊富な数学的知識に支えられていたかについては、『*Northwest Journal*』誌で「Best of Northwest Journal」の記事にも選ばれている J. ゴッドフレッドの研究がある。J. Gottfred, 'How David Thompson Navigated' （*Northwest Journal*） http://www.northwestjournal.ca/dtnav.htmlこれは、Smyth, David. 'David Thompson's Surveying Instruments and Methods in the Northwest 1790-1812.' *Cartographica 18* no. 4 (1981), pp 1-17. と合わせて参照されたい。測量、地図製作が如何に大きな困難を伴うかは、新田次郎の小説『剣岳』などでも知ることができる。また、16世紀～18世紀の測量機器の歴史と地図製作技術については The Mapmakers: An essay in four parts http://www.bac-lac.gc.ca/eng/discover/exploration-settlement/pathfinders-passageways/Pages/mapmakers-essay.aspx に概要がある。

メティス（混血）の妻シャーロットについては上記 6 冊の評伝の他 Moccasin Miles - The Travels of Charlotte Small 1799-1812：http://www.arcturusconsulting.net/products.htm 近年のジェンダー論やメティス研究の進展で、シャーロットについての論考類もいくつか現れるようになっている。

トンプソンの時代、毛皮フロンティアを求めて奥地の森に入り込み、先住民の集落に住み着いた毛皮商人 fur trader や罠猟師 trapper, coureures de bois、探検家 voyageurs は、先住

民有力者の娘を妻とすることが少なくはなかったが、それはたいていは一時妻 country wife で、毛皮を乱獲してしこたま儲けた後は、妻も子供も捨てたり奴隷に売ったりしてさっさと東部モントリオールや英本国に帰還する者がほとんどであった。そんな時代に、トンプソンは先住民に対する強い敬慕の念を貫き、58年という長い間（記録が残る限りでは、カナダ史上最長記録）波乱の生涯をシャーロットと共に過ごしたのである。結婚してから13年後、引退直後にトンプソンがまず最初に行なったことは、モントリオール近くの教会での正規の結婚式である。

筆者の旧著・新著や本稿の論調とは全く逆に、カナダや日本の歴史研究では「カナダにおける多くの優しい絆」説がたいそう評判である。筆者は年来、旧著『毛皮と皮革の文明史』と同じように毛皮フロンティアにおける「多くの優しからざる絆」に焦点を当てているが、毛皮フロンティアで「猟師や探検家がプライベートに先住民女性を奴隷として売買するのが案外当たり前だったのでは？」という問題が最近になってカナダでも関心と議論を呼んでいる。その点にふれた先駆的文献として、Raymond Wood and Thomas D. Thiessen, *Early Fur Trade on the Northern Plains*（Norman: University of Oklahoma Press, 1985）. この文献は、筆者と同等な観点からトンプソンに言及しているバーナード・スチュアートの次のサイト Stuart, Barnard. Insightful Exploration: An Early Explorer's Perspective on Western Aboriginals（in *Lethbridge Undergraduate Rescarch Journal*, Vol2, No.1）2007. https://lurj.org/issues/volume-2-number-1/thompson や Trudel, Marcel. *Deux Siècles d'Esclavage au Québec*（Éditions Hurtubise, 2004）と共に、筆者の従来の分析視点を補強するものである。なお、トゥルーデルには英訳本の *Canada's Forgotten Slaves: Two Centuries of Bondage*（Dossier Quebec, 2013）がある。

元々、今までカナダ史の分野では労働史関連の研究蓄積が内外共に手薄で、特に先住民労働の実態については史料自体が少なくて、実像はなかなかつかみにくい。とりわけ、人種差別の激しかった北米南部、西部、北西部についてはそれが顕著である。因みに、トンプソンと同時代人でトンプソンと面識があり、特別な尊敬の念をトンプソンに示したことがある J・J・ビグスビィなどは、「カナダの奥地、とくに北西部でどんなことが起きているか、そんなことは全く分からない。しかし、トンプソン氏は、まるでその場に居合わせたかのように、臨場感たっぷりにいろいろなことを教えてくれ、その語りは、ほかの誰の話を聞くより真に迫っている」といったことを書き残している[4)]。

北西部毛皮フロンティアで、HBC などによる先住民の奴隷使役が当たり前のように流行（slaves were prevalent in the HBC workforce）していたことについては、Richard Somerset Mackie, *Trading Beyond the Mountains: The British Fur Trade on the Pacific, 1793-1843*（UBC Press, 1997）の第12章などを参照されたい。コロンビア川周辺での毛皮取引の歴史については Elliott, Thompson Coit, *The Fur Trade in the Columbia River Basin Prior to 1811*（Kindle 版）がある。

4）John J. Bigsby, *The Shoe and Canoe: or, Pictures of Travel in the Canadas, illustrative of their scenery and of colonial life; with facts and opinions on Emigration, state policy, and other points of public interest; with numerous plates and maps*（1850）（https://archive.org/detailsshoecanoeor pictu01 bigsuoft/page/114/mode/2up?q=Thompson）

更に、カナダでの奴隷制の歴史については、Cooper, Afua. *The Hanging of Angelique: The Untold Story of Canadian Slavery and the Burning of Old Montreal*（University of Georgia Press, 2007）. Hajda, Yvonne P. “Slavery in the Greater Lower Columbia Region,” *Ethnohistory* 2005 52（3）: 563-588, Riddell, William Renwick. “Further Notes on Slavery in Canada”（*The Journal of Negro History*, vol.9（1）: 1924）, 26-33. Smith, T. Watson. *The Slavery in Canada*（Collections of Nova Scotia Historical Society, 1899）http://www.acrosscan.com/slavery-canada/slavery-in-canada.htm などがある。Ned Blackhawk, *Violence over the Land: Indians and Empires in the Early American West*（Harvard University Press, 2008）. Andrés Reséndez *The Other Slavery: The Uncovered Story of Indian Enslavement in America*（Houghton Mifflin Harcourt, 2016）. Peter Cozzens, *The Earth Is Weeping: The Epic Story of the Indian Wars for the American West*（Knopf, 2016）などと合わせて参照されたい。

アメリカ、カナダでは先住民問題は一種の「タブー」という面がある。（カナダが「第二の人権宣言」と言われた国連の先住民の人権に関する宣言に対するスタンス変更を表明したのは、2015年。それまでは棄権ではなく、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドと共に「反対」を主張していた。）それもあって、こうした「カナダの奴隷」に関わるような書物は、内外のカナダ史の専門研究者も含めて、あまり広くは読まれて来なかったのではないだろうか。「優しい絆」説に容易に傾斜する素地は、そうしたところに生まれる[5)]。

「優しい絆・優しからざる絆説」のどちらの説にも傾斜しない穏当な立場、すなわち先住民保留地の調査も踏まえて「毛皮交易への北米先住民の係わり方は一様ではなく、毛皮交易は先住民社会を破壊するという仮説は北米先住民社会のすべてに妥当するわけではない」とする A.J.Ray や岸上伸啓氏の業績などは常に重視すべき最も穏当な立場であるが、「先住民の人権宣言」の問題や全く異様な近代奴隷制の展開、多数の先住民社会崩壊の意味を考えると、「優しからざる絆説」を強調せざるを得ないというのが自然だろう。「日系カナダ」のキーワードでネット検索をかけるだけでも、20世紀末までカナダでの日本人に対する差別がいかに理不尽で過酷なものであったかがすぐに判る。

なお、「多くの優しい絆」説の日本への紹介者であり、その説を自説の「根幹」と強調していたカナダ史家の木村和男氏は、当然のことながら、『カヌーとビーヴァーの帝国』や『毛皮交易が創る世界』などの著作で、筆者の名前を何度も上げて全面否定の議論を展開しているが、実は、木村氏と何度も親しく私信を交わしたことがある筆者には、その批判には余りにも意外な点が少なくはなかった。筆者の主張を批判する木村氏の論調はずいぶんと感情的で、時に学術的議論として異様に不十分なことも感じられるのである。イギリス帝国史の展開の中にカナダ史を位置づけようとする木村氏の多くの優れた論文・著作類を筆者は前々から高く評価していたが、大病を抱え、考察や推敲に十分な余裕が持てなかったためであろうか、筆者への批判は「わが愛するカナダに、門外漢が口をはさんだ」といった感じのものがほとんどで、批判された側としては戸惑うことが多かったというのが正直なところであ

5）「優しからざる絆説」からの毛皮史の解析については、拙稿「ゴースト・ネイチャー：北米における毛皮フロンティアの展開とエコクライシス」池谷和信編『地球環境史からの問い』岩波書店、2009年所収）なども参照されたい。

る。特に『社会経済史学』(71巻3号）に書かれた氏による書評は、ずっと以前に同じ『社会経済史学』誌上で田島恵児氏が強く戒めた「章評」にしかなっておらず、議論の仕方もずいぶんとラフなものであった。その批判に対する筆者からの応答は『社会経済史学』(73巻6号）に掲載してある。木村氏と筆者は、「専門性」に対する距離の置き方がずいぶん違っているし、「世界史的視野」の理解も大きく異なっていたため、こうした論争も起こりやすかったのであろうか。拙著への批判を書かれてすぐ直後に木村氏がご逝去されたために、論争らしい論争も交わす機会を互いに持てなかったのは残念という他ない[6)]。

極寒の中、年末に探査に出かけ、隊員が凍死したりしても測量を続行して多くの同僚や部下に「気違い」とまで言われたのがトンプソンであったが、多難な測量活動をつづけ、同時代人の誰にも及びのつかない業績をなし、「劣等人種」のメティスと結婚したトンプソンについては当然、上に言及したグローヴァーの論調に見られる通り、はげしい批判や毀誉褒貶もつきまとった。そのため、「アンチ=トンプソン」と言えるような評伝や言及は多数見られる。「トンプソンは〈困窮した〉と書き残したが、毛皮の利益は実はものすごいもので、実質は同時代の多くの貧困層と比べてそれほど苦しい生活がつづいたとは思えない」とか、「サリーシュの先住民の娘を〈一時妻〉にして子供も産ませている」とか、「論争好きの頑固な男で、年をとってから書いた体験談の人物評は非常に偏っている」とかいうものである[7)]。

しかし、トンプソン自身の完璧な仕事ぶりや仕事に対する責任感を書き留めた文章、遺された地図の完璧さ、同時代の一流測量士や一級知識人による最大級のトンプソンへの賛辞、シャーロットとの「結婚期間記録」などに注目すると、バーナード・スチュアートの言う「Insightful な人物」としてのトンプソン像がむしろ浮かび上がってくることになる。歴史上何か大きな改革をもたらした人物の経歴や差別の歴史の文献、それに人種問題の歴史を長く調べていると気づくことになる問題の一つが、「真理の解明や差別反対の思想・運動に対して、驚くほど積極的に反対する頑迷保守・差別容認主義者の勢力がいつも現れる」ということである。 コペルニクスは「史上最も愚かな狂人」の肖像で描かれてわざわざコペルニクスを愚弄するコインが発行されたし、ガリレオはつい最近まで、350年間異端思想の極悪人とされていた。アメリカを実質的に奴隷解放に導いたジョン・ブラウンは「ただの過激派、急進派」としてだけ長く評された。キング牧師が公民権運動を展開した時には「キングには愛人が50人も居る」といったデマが広く流布されて、一方では「永遠の差別の維持」を公約にしたジョージ・ウォレスがアラバマ州知事を何期も務めた。最近でも、ジョージア州の教育長の公約は「進化論を公立校から排除」であり、元インディアナ州知事で名門パデュー大学学長の教育政策（2010年）は、ハワード・ジンの『民衆のアメリカ史』を「大学や図書館から追放する」というものである。すでに評価高く関連 DVD も出版された同書は、先住民や黒人、社会的弱者への配慮も多く見られる名著なのにである。自由と民主主義の国を標榜する前アメリカ合衆国大統領のトランプが KKK に配慮するかのような発言を公然と行なったこ

6）詳しくは文中に挙げた2冊の『社会経済史学』を見ていただきたいが、最も大きな相違点の一つとして、例えば木村氏の『毛皮交易が創る世界』で書かれている「世界史的視野」と拙著『毛皮と皮革の文明史』で前提としている「世界フロンティア」の内容を比べて見られたい。

7）D'Arcy Jenish, «Exploring David Thompson» https://legionmagazine.com/en/2007/07/exploring-david-thompson/

とは世界中の誰もが知っているが、そうした現状の歴史的背景が如何に根強く北米社会、現代社会に埋め込まれているか、改めて強く認識されておく必要がある[8)]。

それはともかく、カナダを含めた毛皮史研究の最も包括的な研究としては
Delort, R. *L'HISTOIRE DE LA FOURRURE de l'Antiquité à nos jours*,(EDITA LAZARUS, 1986). が、他には類書がない貴重な文献である。デロールは、幾つかの翻訳本で日本でも前々から知られている。邦語文献では西村三郎『毛皮と人間の歴史』（紀伊國屋書店、2003）、下山晃『毛皮と皮革の文明史』（ミネルヴァ書房、2005）。下山『毛皮と皮革の文明史』はハドソン湾会社、北西会社、ロシア・アメリカ会社など各種毛皮会社の歴史、ジョン・ジェイコブ・アスターの人物像などを紹介するとともに、2004年までの毛皮史関連の内外の主な研究諸文献を包括的に辿ってある。毛皮史研究の歩みに関心のある向きは、http://www.members.shaw.ca/gearens/HistandClass/bibliofur.htm と共に参照されたい。

カナダの大学図書館のサイト（例えば The University of British Columbia Library の Open Collection）や Library and Archives of Canada のホームページ http://www.bac-lac.gc.ca/eng/Pages/home.aspx などで「David Thompson」のサイト内検索をかければ、すぐに多数の関連書籍やサイトにリンクできる。Library and Archives of Canada のサイト内検索でヒットしたものの内、新著で言及したサミュエル・ハーンやピーター・ポンド、アレグザンダー・マッケンジー、サイモン・フレイザーなどの活動と共にトンプソンの探査の跡を追えるのは Mapping the Northwest：http://www.bac-lac.gc.ca/eng/discover/exploration-settlement/pathfinders-passageways/Pages/mapping-northwest.aspx

アメリカ独立の後、カナダとの国境確定に最大の寄与を行なったのがトンプソンであったことは上に述べたが、国境問題が一時的に検討されていたパリ条約については、Yale Law School Lillian Goldman Law Library のウェブコレクションに参照サイトがある。アドレスは http://avalon.law.yale.edu/18th_century/paris.asp である。パリ条約の後、米加国境を交渉して結ばれたジェイ条約と当時の国境確定問題の争点については、
Bemis, Samuel Flagg, "Jay's Treaty and the Northwest Boundary Gap."（*The American Historical Review*, Vol.27, No.3, 1922, pp.465-484.

ハドソン湾会社については E.E.Rich の多くの業績のほか、読みやすいものには
Newman, Peter C. *Empire of the Bay: An Illustrated History of the Hudson's Bay Company*（The Madison Press Limited, 1989）がある。ただし、ニューマンは「アンチ・トンプソン」の立場の歴史家であるから、この本でのトンプソンへの言及は僅かにとどまっている。

ハドソン湾会社のライバル企業であった北西会社については Innis, Harold A., *The Fur Trade in Canada: An Introduction to Canadian Economic History*（Univ. of Toronto Press, 1930). Campbell, Marjorie W., *The North West Company*（Macmillan, 1957, rep.1983). Campbell, *The Nor'Westers; The Fight for the Fur Trade*（Fifth House, 2002). Masson, L.R.

8）こうした、「南部化」に傾斜する動き（奴隷制度が合法であった南部を容認し受容する姿勢）が度々アメリカやカナダで再生される社会的・歴史的要因については、拙稿「ケンタッキーの本当のチキン：〈南部化〉した境界州：麻と奴隷制」（同志社大学『経済学論集』第71巻第4号、107-121頁）および BBC 作成の DVD『人種主義の歴史』（丸善、2007）、A+E Networks 提供『白人至上主義』（Amazon プライムビデオの「ドキュメンタリー」に収録）。

Les Bourgeois de la Compagnie du Nord-Ouest. Antiquarian Press, 1960. Morton, A.S. «The North West Company's Columbia Enterprise and David Thompson.»（*Canadian Historical Review* 17, 1936）266-288.

Wallace, W. Stewart. *Documents Relating to the North West Company*（The Champlain Society, 1967）.

映像資料として

Uncharted Territory: David Thompson on the Columbia Plateau：https://www.youtube.com/watch?v=EccSnNgQP7c

David Thompson: The Great Mapmaker：https://www.nfb.ca/film/david_thompson_the_great_mapmaker/

The Feud Between the Hudson Bay and the Northwest Company: https://www.youtube.com/watch?v=bXfXn9j17BM

などがあるが、実際の罠猟師や探検家は、夏場の無数の蚊（今でもマニトバ州の州鳥のシンボルは蚊）を避けるためにぼさぼさ髪を肩まで伸ばし、着たきりの鹿革服に酒灼けの赤ら顔の無法者が多く、映像に登場する小ぎれいな俳優とはずいぶん印象の違うものだったと思い至っておく必要がある。毛皮や鉱山を掘り当てる Bonanza を狙って一攫千金の機会を貪欲に追うのが、「開拓者」の実像である。しかも、銃器を携えた白人入植者が西部・北西部に殺到した19世紀半ばから世紀末には白人＝先住民の敵対関係が極点に達してしまい、先住民と見れば無闇に殺して回る荒くれも少なくはなかった。死体の頭皮を剥いで保安官事務所に持っていくと、「大人の男のものなら10ドル、女は5ドル、子供なら3ドル」などという報償もあって、賞金稼ぎのためにスカルプして回る冷血漢もあちこちに居たのである[9)]。

＊以下、紙数の都合もあるため、「おわりに」のまとめに入る前に、新著執筆にあたって参照した文献・サイトの主なものだけを、順不同で挙げておきたい。この研究ノートが、北米北西部の歴史の実像を読み解くためのささやかな手がかりになることを望みたい。

Brown, Jennifer S. H. 'The Presbyterian Métis of St. Gabriel Street, Montreal', pp. 195-206 in Peterson, Jacqueline, and Jennifer S. H. Brown, *The New Peoples: Being and Becoming Métis in North America*. University of Manitoba: Winnipeg, 1985.

Henry, Alexander（the younger）. Coues, Elliot（ed.）. *New Light on the Early History of the Northwest: The Manuscript Journals of Alexander Henry*... Reprint: Ross & Haines: Minneapolis, 1965. Originally published 1897.

Lamb, W. Kaye（ed.）*The Journals and Letters of Sir Alexander Mackenzie*. Cambridge University

9）手元には多数の関連文献があるが、入手・参照しやすいものとして、藤永茂『アメリカ・インディアン悲史』とディー・ブラウン『わが魂を聖地に埋めよ』の2冊の書名のみを挙げておく。

2015年にカナダで先住民への政策がようやく見直され始めて以来、先住民への数々の非道な行ないが次々と明らかにされてきている。例えば2021年6月7日配信の BBC News「あらゆる虐待を受けてきたカナダ先住民寄宿学校問題」（www.bbc.com/japanese/video-57380637）を参照。今後もこうしたニュースは数多く現れ、「多くの優しい絆説」の見直しも進んで、カナダ史や北米北西部の歴史の実像が一層正確に広く知られて行くことになるだろう。

Press: London, 1970.

Ruggles, Richard I. 'Hudson's Bay Company Mapping,' pp. 22-36, in Judd, Carol M. and Arthur J. Ray (eds.), *Old Trails and New Directions: Papers of the Third North American Fur Trade Conference*. University of Toronto: Toronto, 1978.

Hudson's Bay Company (TSX: HBC)

Our History: People: Explorers: David Thompson

http://www.hbcheritage.ca/hbcheritage/history/people/explorers/david-thompson

Manitoba History: Samuel Hearne and David Thompson, Trekking in the Footsteps of the Enlightenment: A Retrospective Review Essay http://www.mhs.mb.ca/docs/mb_history/49/trekking.shtml

Mountain Man Canadian Western Exploration on Indian Cultures

Fur Trade's Role in America's Western Expansion Historical Facts Pictures Maps

http://thefurtrapper.com/home-page/david-thompson/

Dictionary of Canadian Biography/Dictionnaire biographique du Canada (DCB/DBC)

THOMPSON, DAVID, http://www.biographi.ca/en/bio/thompson_david_1770_1857_8 E.html

The Life of David Thompson, by J. & A. Gottfred. http://www.northwestjournal.ca/V1.htm

David Thompson and the Fur Trade

http://www.archives.gov.on.ca/en/explore/online/thompson/fur_trade.aspx

Ned Eddins, History of David Thompson with Pictures and Maps: The Fur Trade Role in Western Expansion: Exploration Home Page http://thefurtrapper.com/home/david-thompson/

Montana Outdoors, Incredible Journeys The life and travels of fur trader David Thompson, the first white to explore and map today's northwestern Montana and western Canada, were nothing short of remarkable. By Dave Walter http://fwp.mt.gov/mtoutdoors/HTML/articles/2007/davidthompson.htm

CBC Learning, Winter with a Native Elder http://www.cbc.ca/history/EPCONTENTSE1EP6CH4PA2LE.html

Historcal Canada, David Thompson: The Greatest Geographer the World has Known

http://www.thecanadianencyclopedia.ca/en/article/david-thompson-the-greatest-geographer-the-world-has-known-feature/

Canada's History, Canada's Greatest Explorers http://www.canadashistory.ca/Magazine/Online-Extension/Articles/Greatest-Explorers

Exploring the Old Oregon Country Tracking David Thompson and the North West Company across the Canadian and American West. http://www.truewestmagazine.com/exploring-the-old-oregon-country/

David Thompson: Cartographer http://www.layers-of-learning.com/david-thompson-cartographer/

The Manitoba Historical Society, Manitoba History: Samuel Hearne and David Thompson, Trekking in the Footsteps of the Enlightenment: A Retrospective Review Essay by Alexander Binning

Native American Netroots The Pacific Fur Company Posted on August 25, 2012 by Ojibwa
http://nativeamericannetroots.net/diary/1371

おわりに

トンプソンが生きた時代、北米ではタバコや麻や綿花を大量に強制労働で栽培する奴隷制プランテーションが、世界史上稀にみるような規模と徹底した「合理化」（品種改良や奴隷の「養殖」、詳細な規定を持った「奴隷法」の制定など）を伴って拡大し、白人移民の激増で先住民社会は全大陸規模で壊滅に向かっていた。語られ続けてきた歴史は、大方は、あくまでも「開拓」を押し広げた側の白人移民の言説による歴史であり、自派の勢力伸長を「神の意志」と信じ込む者たちが語り伝えた歴史である。そうした怒涛の勢いで広がり続けた社会の趨勢は、19世紀末の「フロンティアの消滅」と共に消え失せたと言えるだろうか？「多くの優しからざる絆」は、至る所にさまざまな姿で現れ、一つの民族文化や一国の歴史までを根底から失わせるような粗暴さ冷徹さで滞留し、あちらこちらに潜んでいると思い定めるのが、本当は歴史と向き合う「自然な姿勢」とは言えないだろうか。40年近く、毛皮の世界史と奴隷制度史や先住民問題を絡め併せた探求をし続けて一番強く実感しているのが、残念ながらそうした思いである。それは人と人との関係に関わる歴史というばかりでなく、種の絶滅までを連鎖的な展開で被った生き物たちと人との関係にも直結した歴史であり、生き物と社会・文化の関係を包括的に捉える歴史認識こそが「最も大事なこと」（養老孟司）ということになりそうである。北米北西部「開拓」の歴史は未だ終結してはいない。そう考えざるを得ない考察となったが、如何なものであろうか。

なお、本稿と新著『奇跡の地図を作った男』および本稿注3）の論稿「毛皮：北米交易圏をめぐる二つの歴史層」の執筆にあたっては、大阪商業大学でオンラインデータベース Global Commodities: Trade, Exploration & Cultural Exchange と The Making of the Modern World、そして「ハドソン湾会社関連文書」全33巻（The Publication of the Hudson's Bay Record Society）も参照することができた。高額な貴重な資料・史料を取り揃えていただいたことに感謝したい。